

第20回記念「上方花舞台」

歌舞伎と日本舞踊の競演

2018年9月20日・21日(3公演)／国立文楽劇場

主催：公益財団法人関西・大阪21世紀協会 上方文化芸能運営委員会

協力：松竹芸能株式会社、株式会社藤間オフィス、株式会社アロープロモーション

構成・演出：藤間 勘十郎

当協会の上方面文化芸能運営委員会は、上方文化の伝承と振興に力を注いでいます。
第20回記念となる今回の「上方花舞台」では、3部構成による歌舞伎と日本舞踊の競演を、
2日間・3公演で1,900人を超える観客の皆様楽しんでいただきました。

撮影：©越田信全

第一部 長唄「三番叟」

登場するのは翁(市川猿之助)と千歳(藤間勘十郎)と二人の三番叟(若柳吉蔵、尾上菊之丞)。翁太夫は千歳から渡されたご神体である面(おもて)をつけることで「翁」に変化し、国がますます栄えるようにと寿いで舞います。同じく黒尉の面をつけた三番叟は五穀豊穡でありますようにと、種まきを思わせる所作で「鈴の段」を舞います。

素踊りで上演したこの演目は、常磐津や義太夫などさまざまな三番叟の曲の良い部分のみを抜き出し、長唄の曲として補強したものです。
＜歌舞伎＞と＜日本舞踊＞、
＜江戸＞と＜上方＞の競演となり、この公演にふさわしい幕開けとなりました。



若柳吉蔵(左)と尾上菊之丞(右)



市川猿之助(右)と藤間勘十郎(左)

上方花舞台

第二部 長唄「石橋(しゃっきょう)」

能「石橋」から歌舞伎舞踊に取り入れられた演目。寂昭法師が細く苔むした石橋を渡ろうとすると、菩薩さまにお仕えする獅子の精が現れ、咲き乱れる牡丹の花と戯れて豪華絢爛に舞います。それは菩薩さまが現れる前兆と感じられます。

親獅子(尾上右近)、仔獅子(中村鷹之資)、女獅子(中村梅丸)の三人連獅子の趣向に6人の若手舞踊家が胡蝶の精(花柳禮毬、花柳双子、花柳女雛、煤茂都梅弥月、若柳舞生、若柳弥天)となって絡む構成で、楽曲も歌舞伎の名作を集めて構成した本公演のための作品です。歌舞伎若手花形と女流舞踊家陣の華やかな競演となりました。



尾上右近(中央)、中村鷹之資(右)、中村梅丸(左)による三人連獅子

女流舞踊家陣(胡蝶の精)との競演。
尾上右近(奥中央)、中村鷹之資(同右)、中村梅丸(同左)

第三部 長唄「黒塚(くろづか)」

芒(すすき)が生い茂る野原にたつ粗末な一ツ家に、阿闍梨祐慶(藤間勘十郎)とその一行(尾上右近、中村鷹之資、中村梅丸)が宿を求め訪れます。主である老女岩手(市川猿之助)は、流罪となった父と共に陸奥をさすらい、夫に捨てられた身の上を語り、人を恨む気持ちが捨てられず成仏できないだろうと悲しみます。祐慶は仏の功德によって必ず成仏できると説き慰め、岩手は心の憂いが晴れたと喜びます。夜が更けて、祐慶一行に閨(ねや)を覗かぬよう念を押した岩手は薪を取りに裏山へ出かけます。供の強力が約束をやぶり閨の内を覗くと、そこにはたくさんの人骨が。岩手は安達ヶ原の鬼女だったのです。

一方、祐慶の教えで長年の苦しみから解放された岩手は、月明かりの中一面の芒野原で、童心に返って踊ります。そこへ慌てふためいて逃げてきた強力に出会い、閨を覗かれたと怒り悲しんだ岩手は鬼女の本性を顕わして姿を消します。再び姿を現した鬼女は、芒野原で祐慶一行に襲いかかりますが、法力で祈り伏せられてしまうのです。

二世市川猿之助によって初演された本曲を当代猿之助が大阪で初めて演じました。特別演出として旅僧は能装束・直面(ひためん)にて勤め、老女は歌舞伎衣装という試みで、歌舞伎舞踊を能楽・狂言等々の他のジャンルと共演することや新演出などで、さらなる進化を目指す意欲作となりました。



芒野原で祐慶一行に祈り伏せられる鬼女(岩手)
左から中村鷹之資、市川猿之助、中村梅丸、藤間勘十郎



阿闍梨祐慶とその一行が宿を求め訪れる
左から尾上右近、中村梅丸、藤間勘十郎、中村鷹之資



岩手(市川猿之助)



月明かりの芒野原で佇む岩手(市川猿之助)